

# 海繭の仔

作 河合穂高

## 登場人物

- 愛 (20) 5年前の集団自殺で、双子の姉である優子を失っている。
- 田中 (20) 愛とは同じ大学の同期。クジラモドキをこよなく愛する。海繭を研究している研究所に憧れて、施設見学を希望する。5年前に、打ち上げられたクジラモドキを見に葦ノ浦を訪れており、「ストウさん」や優子に出会っている。
- 由紀 (29) 愛の従姉で医者。唯一、愛と優子に血縁関係がないことを知っている。
- 小百合 (43) 愛の母親。定食屋兼民宿「三日月」を経営している。
- 西崎 (32) 研究所の職員。愛と田中の大学の遠い先輩で、研究所に就職してからは「三日月」の常連。小百合や愛とは顔馴染み。
- 優子 愛の双子の姉。集団自殺で突然の死を遂げる。動機はわかっていない。

上演時の連絡先

河合穂高 : de18018@s.okayama-u.ac.jp

1

太平洋に細長く張り出した半島。

頭上の空は晴れているが、水平線から湧き上がった入道雲は雷を孕み、内側から激しく発光して、夜空を白く濁らせる。

葦ノ浦にある定食屋「三日月」。夜は居酒屋になり、民宿も兼ねている。

食堂スペースは上手から下手へ石のタイルが敷かれた細い通路があり、奥はカウンター。その向こうは台所。通路の手前は上がり框が渡され、座敷になっている。上手にはレジと店の入り口がある。

下手側は住居スペース。食堂とは暖簾で仕切られている。こちらも座敷で、小さな仏壇がある。

住居スペースに田中と愛がいる。

田中 ……。

愛 どうしたの？

田中 え？ いや、何でもない。

愛も窓の外に目を向ける。

愛 ……あ。

ゴロ、ゴロゴロゴロ……と遠くの雷鳴が遅れて聞こえてくる。かなり遠いようだ。

田中 光ってるのが見えて。

愛 雷か。

田中 なんの光かと思つて。

しばし、光る空を二人はみている。

愛 こつちにまで来るかな？

田中 どうかかな？

愛 最近多いよね。夜に急にすごい雨降るの。

田中 夕立みたいなの？

愛 そうそう。

田中 朝起きたら、洗濯物びしょびしょとか。

愛 そこは取り込みだよ。

田中 忘れるんだよね。

愛 なにを？

田中 干してるのを？

愛 そんなことある？

田中 あるでしょ？

愛 え、じゃあ、もう一回洗濯し直すの？

田中 いやいや、そのまま干しとくんだよ。そしたら乾くじゃん。

愛 まじで？

田中 え？

愛 汚いでしょ？

田中 そう？

愛 だって雨って川の水みたいなんもんじゃない。

田中 違うでしょ？

愛 あ。ドブの匂いがしてきた。

田中 え！

愛 くさいくさい！

田中 しないから！

愛 いやするよ！ 大学の裏の竹藪と同じ匂いするよ！

田中 なんだそれ！ とうかこの服、普通に洗って取り込んだやつだから。

愛 本当に？

田中 本当に。

愛 じゃ、気のせいだ。

田中 おいー。

愛 ……傷ついた？

田中 酷いよ。

愛 可愛そう。

田中 傷つけたの三日月さんだから。

愛 うん。ごめん。何も匂わないよ。無臭。

田中 本当に？

愛 ごめんね。

田中 酷い人だよ、まったく。

窓の外がまた光る。

田中 ああ。また光った。

愛 ……。

田中 ねえ、この光は何色に見える？

愛 え？

田中 雷の光も普通の白色と全然違うんだろうね。

愛 ……何の話？

田中 え、眼だよ。眼の見え方の話。

愛 はあ。

田中 ……おかしいな。なぜだろうか……。

愛 ……。

西崎 (声だけ) ただいまー。

愛 あ。

田中 ……。

愛 続きはまた後ほど。

田中 え？

発泡スチロールを持った西崎が入ってくる。

西崎 これだよ、少年。

田中 ああ。

西崎 よいしょ。

箱の中には、ザンズキと呼ばれるタコ的一种が入っている。

田中 これがザンズキ？

西崎 いかにも。

田中 赤！

西崎 茹でダコじゃないよ。生だから。

田中 へー。

愛 本当に初めて見たの？

田中 うん。

愛 へー。

田中 これ蛸なんですか？

西崎 正式には、アカミミズクモタコ。タコの中では最も深海に棲むグループだね。

愛 正式名称とかあるのか。

西崎 日本ではこの辺りではしか獲れない。

田中 どうやって食べるんですか？

西崎 色々だよ。酢の物から、刺身から。味噌汁も。家によって食べ方が違って、ねえ？

愛 はい。ま、私は食べませんけどね。

2人 え？

愛 いつ言おうかと思ってたんだけど。

西崎 うそお！

愛 無理なんす。

西崎 マジで？

田中 ザンズキあるあるであんな盛り上がったのに……。

愛 昔、虫抜きするところ見ちゃって。

田中 虫抜き？

愛 寄生虫を取るのにさ、ニガリに半日くらい漬けとくんだけど。そしてたら、この、この頭の辺りから白いウニョウニョしたのが、ムニムニムニっていつぱい出てくるの。もう、エイリアンだから。

田中 グロそう。

愛 やばいよ？

西崎 いやいや。海の生き物なんて大概寄生虫だらけだから。抜いてるぶん安全でしょ。

愛 そういうことではない。

西崎 エセ葦ノ浦民め！

愛 ふん。最近出てなくて清々してる。

田中 出てこないんだ。

西崎 風評被害だね。

田中 ああ。

西崎 これだって、知り合いに頼んでやっと捕ってきてもらったんだから。

田中 そうなんですか。

愛 それ、冷蔵庫に入るとききます？ もう呑んだから帰れないでしょ？

西崎 そうね。

田中 そんなにこれと、クジラモドキって似てるのかなあ。

西崎 全然似てないよ。

田中 すすよね。

西崎 クジラモドキは脊椎動物、ザンズキは軟体動物。親子の訳がない！

愛 どっちも気持ち悪いよ。

西崎 悪くない！

田中 三日月さんって、リアルタイムでクジラモドキ見てるんだよね？

愛 うん。打ち上げられたの、すぐそこだからね。

田中 いいなー。

西崎 田中君って、当時そのために、わざわざ葦ノ浦まで来たんでしょ？

田中 はい。

西崎 何歳？

田中 15です。高1です。

西崎 よく来たよね？

田中 そうですか？ だって地球外生命体ですよ？

西崎 違うよ。

田中 あの時真剣にそう言われてたじゃないですか。

西崎 テレビでね。

田中 そしたら見に行っちゃうでしょ？

愛 行かないよ。

田中 行ってくつて。夏休みだったし。

愛 衝動的。

田中 ま。着いたら宿がなくて大変だったんだけどね。

西崎 あの事件と同じ時期か。

田中 はい。僕はてっきりみんなクジラモドキを見に来てる人たちだと

思ってたんですけど。

西崎 んな訳ない。

田中 でも、発光現象見に人が集まってくるのも、同じくらい変な話と

思いますけど。

西崎 それはね。

愛 あの時はすごかったな。うちの民宿だって、母屋の使っていない部屋

まで客室にしてたんだから。

西崎 あれはあれで、よく分からん事件だったよな。

田中 ですよね。

愛 で、その時は結局、田中君は何処に泊まったの？

田中 野宿。

西崎 若いねー。

田中 先生はもう。

西崎 バリバリの大学院生よ。してましたよ調査。だって、なにを隠そうクジラモドキを持ち上げるクレーン、手配したの俺だからね。

田中 じゃあ、あの解剖のとき現場にいたんですか？

西崎 写真撮ってました。

田中 遠くで見えました！

西崎 見学に来てたんだ。

田中 はい。

西崎 へー！

愛 その時の高校生が、こうやって研究所に入りたたって、見学に来た

わけですよ。

西崎 素晴らしいね。

愛 明日は何するんですか？

西崎 まあ、普通に海繭を見てもらって、その後水槽の裏側とか、研究

室を案内するよ。所長とかも紹介するし。

田中 よろしくお願いします。

西崎 みんな楽しみにしてるから。

愛 行つてらっしゃい。

西崎 あれ？ 三日月さん来ないの？

愛 いきませんよ。私は海繭に興味ないので。

西崎 来たらしいじゃん。

愛 結構でーす。

コンコンとノックの音。小百合がやってくる。

小百合 お風呂沸きましたよお。(窓の外を見て) あら。雨？

西崎 まだ降ってなかったですよ。

小百合 最近、雨多いわね。

西崎 雲は遠くにありそうですね。光ばっかり。

小百合 ……。

愛 田中君お風呂入りなよ。先生今日は泊まってくいでしょ？

西崎 いつもいつも、そして今日も、ご厄介になっていいんでしょうか？

小百合 何をいまさら。

西崎 面目ない。

小百合 (発泡スチロールの箱を見つけて) あら？

西崎 ああ。俺のです。

小百合 なに？

西崎 初物ですよ。

小百合 あら！ どうしたんです？

西崎 知り合いに分けてもらったんです。

小百合 もしかして山本さん？

西崎 え？

小百合 よく知ってますよ。主人の同級生。私も今日山本さんから何匹

か仕入れたんです。

西崎 本当ですか。

小百合 この辺りでザンズキ漁続けてるの、あの人くらいじゃないか

な？

西崎 貴重ですよ。

小百合 本当に。

西崎 ご主人もまた始められたりしないんですか？

小百合 うち？ ないない。

西崎 そうなんですか？

小百合 ええ、ええ。捕っても、娘は食べてくれないし。

西崎 聞きましたよ！ 酷いですよ！

小百合 ねー。

愛 いいでしょ、それは。

西崎 よくないぞー。

小百合 それ、冷蔵庫入れなくていいの？

西崎 あ。そうでした。じゃあ。

西崎は箱を持って一度部屋を出て行く。

小百合 そういえば、明日は何時ごろ出ます？

田中 多分8時くらいじゃないかと。

小百合 じゃ、7時くらいに朝ご飯用意しときますね。

田中 すいません。

愛 いいよ。西崎先生なんて、しょっちゅう朝食で行ってるんだよ？

田中 そうなの？

小百合 明日は頑張ってるね。

田中 え？

小百合 コネを作りに来たんでしょ？

田中 ち、違いますよ！

小百合 大事よ。そういうの。

愛 したたかなやつよ。

田中 三日月さん、どんな伝え方を……。

西崎 ま。俺、コネ無いけどね。

西崎が言いながら戻ってくる。

田中 そういうんじゃないですってば！

西崎 うんうんうん。分かってるって。

小百合 じゃ。お風呂入っちゃってね。

愛 はーい。

窓の外がひととき強く発光し、その直後に大きな雷の音が響く。一瞬間があつて、思い出したように激しい雨が降り始める。

西崎 おお、おお。ついに降りだしたか。

愛 すごい雨。

小百合 通り雨だと思ふけど。

西崎 明日も降ってたら見学中止な。

田中 遠足か！

とどろく雷鳴。激しい雨。

2

晴れ渡った朝。食堂スペースに由紀と小百合がいる。

由紀 (必死で矯正器具に引っかけた食べかすを爪楊枝で取り除いている) ……。

小百合 ちよつと。

由紀 んー？

小百合 ちよつと。

由紀 あにー？(なにー？)

小百合 手で隠しなさい、せめて。

由紀 あにを？

小百合 口を！

由紀 ……ちよつと待つて。

小百合 ……。

由紀 取れた！ あー、やつと取れた！  
小百合 ……よかつたわね。

由紀 外から見えにくいつていうから歯の裏にワイヤーしたのに、すんごい物が詰まる。

小百合 今さら矯正なんてしてるの？

由紀 最近、成人矯正増えてるのよ？ 日本人くらいよ、ぐちゃぐちゃの歯並びで平気なの。

小百合 その前に、人前で大口あけてシーシーするのをやめなさい。

由紀 へいへい。

小百合 (ため息) 雅美も心配してるわよ。ここ何年か全然家に帰ってないらしいじゃない。

由紀 全然ってことないよ。

小百合 病院そんなに忙しいの？

由紀 病院はそうでもない。

小百合 じゃあ。

由紀 まあ。だいぶ楽になつてきたから。

小百合 なにが？

由紀 別に。

愛が寝癖をつけたまま、部屋にやつてくる。

愛 あれ？

由紀 おーっす。

愛 由紀ちゃんじゃん。どうしたの？

由紀 ザンズキが入つたと聞きました。

愛 はや。

小百合 そうでもしないと捕まらないのよ。

由紀 ザンズキの誘惑には勝てませんな。

愛 ただのタコじゃん。

由紀 ただのタコなら、あんただって食べてるでしょ？

愛 そうだけど。

小百合 ねえ。田中君から連絡無かった？

愛 ああ。なんか研究所に入れてもらえないんだって？

小百合 やっぱりそうなの？

愛 なんかあったの？

由紀 誰、田中？

愛 友達。

由紀 あんたの？

愛 うん。

由紀 へー！

愛 なに感心してるのよ。

由紀 いや、別に。

小百合 それで、なんで入れないの？

愛 え。母さんも知らないの？ まだライン返してないや。

小百合 えー？

由紀 既読無視だ。

愛 今返しますけど。

愛 スマートフォンを取り出して返信する。

由紀 なるほどね。こういう感じで、いつも返事がなかなか返ってこないんだ。

小百合 そうね。

由紀 大学生と思えないレスポンスの悪さよね。

愛 うるさいな。……あ。返ってきた。

由紀 ほら。これが大学生らしい若い健全な返信速度よ。

愛 なんか下ネタっぽくない？

由紀 はあ？

小百合 なんて？

愛 ー。研究所で何かあったみたい。……後から来た職員も入れても

らえない人がいるって。

由紀 結構大事じゃない？

小百合 実は、旦那からも連絡が帰ってこないのよね。

由紀 え？ 伯父さんどうしたの？

小百合 昨日から当直で研究所にいるのよ。いつもなら、もう帰ってくる頃なんだけど。

由紀 へー、どうしたんだろ？

小百合 様子見てこようかな？

由紀 でも、入れ違いになるかもよ？

愛 とりあえず田中君が帰ってくるみたいだから、話聞いてみたら？

小百合 ……そうね。事故とかじゃないといいけど。

由紀 事故ねえ……。

愛 研究所って、由紀ちゃん行ったことある？

由紀 あるよ。

愛 どんなどこなの？

由紀 別に。入り口にクジラモドキの骨格標本のレプリカが飾ってあって、奥に大きな水槽があるの。その中に海蘭が1つ浮かんでいる。終わり。



愛 それだけ？

由紀 うん。

愛 しょぼそう。

由紀 研究がメインだからね。

愛 研究しても、何してるの？

由紀 詳しくは知らないけど。中の説明書きによれば、海繭を観察するのが仕事だと。

愛 なにそれ？ クジラモドキが出てくるのを待ってるの？

由紀 まあ、海繭が本当にクジラモドキの卵ならね。

愛 どういうこと？

由紀 海繭って何なのか、実は全然分かってないからさ。世間では勝手にクジラモドキの卵ってことになってるけど、証拠なんか全然無いし。

愛 でも、クジラモドキが打ち上げられたのと同じくらいの時に見つかったって。

由紀 それだけでしょ？ まあ、海繭は2メートル弱もあるから、大き

さ的に、クジラモドキが死ぬ前に産み落としたって考えるのが普通かもしれないけどね。

愛 じゃあ、西崎先生はずっとその卵を監視してるわけだ。

由紀 5年間、生まれもせず、かといって死にもせず。何の生物にしろ、気の長い動物よね。

遠くで救急車両のサイレンの音が聞こえてくる。

由紀 あれ？ これって。

愛 救急車？

由紀 いや。

愛と由紀は外を見に行く。扉を開けるとサイレンの音がぐつと大きくなって、2人の前を何台かの車両が通り過ぎていく。

小百合 ……。

由紀 パトカーだった。

小百合 え！

愛 救急車もいたね。

由紀 本当に何かあったのかもしれない。

愛 警察が何しに来るの？

そこへ田中が帰ってくる。

田中 どーも。

愛 あ、田中君帰ってきた！

田中 ああ、おはよ。

愛 何があったの？

田中 よく分かんないんだよ。

愛 入れてもらえなかったんだよ？

田中 そう。なんか中でトラブルがあったみたいなんだけど……

愛 西崎先生は？

田中 結局会えず……。

小百合 田中君、先生が飛び出して行っちゃうから、慌てて追いかけたのよね？

田中 なにか伝言くらいあってもいいのに。

愛 よつぱど緊急事態だったのかな……。

小百合 やっぱり私、ちよつと行ってくるわね。

愛 あ、うん。

小百合 あんたたちはここにいて。

由紀 分かった。

小百合 行ってきます。

小百合、出て行く。

しばしの沈黙。

田中 お母さん、どうしたの？

愛 ン。ちよつとね。お父さんが今日当直でまだ帰ってこないから、様

子見に行ったんだよ。

田中 そうなんだ。

愛 ……お茶でも入れるよ。

田中 ありがとう。

愛は台所にたつ。

由紀 ……。

田中 ……。

由紀 愛の同級生。

田中 え……、あ、はい。

由紀 結構仲良いの？

田中 三日月さんと？

由紀 ええ。

田中 どうでしょう。学部が違うから普段はなかなか会えませんし。

由紀 あなた薬学部じゃないんだ。

田中 理学部生物学科です。

由紀 そうなの？ じゃどうやって知り合うの？

田中 ……教養の科目でたまたま同じグループになって。

由紀 ああ、そう。

田中 はい。

由紀 え、それだけ？

田中 え？

由紀 それだけでこんな泊まりに来たりするくらい仲良くなる？

田中 あいや、それはきつかけといえますか。その後、三日月さんが葦ノ浦出身だって聞いて、自分も5年前そこにいたので、それで少し盛り上がって……

由紀 集団自殺の時、ここにいたの？

田中 ああ、……はい。

由紀 え？ あなたも発光現象を見にやって来た人？

田中 違います。僕はクジラモドキを見たくて来たので。事件はたまたま同じときに起こりましたけど。

由紀 ああ。それで研究所を見学。

田中 そうです。

由紀 ふーん。

田中は由紀の対応に戸惑っている。愛が戻ってくる。

愛 どうぞ。

由紀 ありがとう。

愛 田中君も。

田中 サンキュ。

愛 災難だったね。

田中 こんなことあるんだね。

愛 うん。

田中 でもお父さんは大丈夫なのかな。

愛 さあ。まあ、何でもないと思うけど。

田中 心配だね。

愛 ありがとう。

由紀 ……え、あんたたち、つきあってるの？

愛 何急に？

由紀 だってここ。ここ、なんか親密な空気！

愛 かもしてない！

由紀 そうなの？

愛 違います。

由紀 付き合うことは悪いことじゃないわよ？

愛 本当に違うの。

由紀 えー、絶対そうだと思うのに。

愛 そういうのね、初対面の人にいきなり聞いちゃ駄目。

由紀 なんでよ？ 時間経ってから急に切り出されるより、最初に潰し

とく方が合理的でしょ？ 私言いふらしたりしないし。というか、私

とあなたの人間関係はほとんど接点無いんだから、知られたってあん

たにデメリットないわけで。

愛 そういうことじゃないの。

由紀 どういうこと？

愛 ごめん。ちよとね、変わってるの。

田中 ……というか、この人誰？

愛 え？ まだ自己紹介してないの？

由紀 ああ、そういえば。

愛 信じらんない。さつき喋ってたじゃない？ あの。この人は私の従

姉です。

由紀 樋口です。

田中 田中です。

由紀 そうか、うっかりしてた。

愛 あのね。

由紀 さつき聞いたんだけど、田中君はクジラモドキに興味があるんで

しょ？

愛 そんな話はしてたんだ……。

由紀 じゃあさ、クジラモドキはどれくらい知能があると思う？

田中 え？

愛 なにそれ？

由紀 知らないの？ クジラモドキは解剖の結果、体重における脳の重

量の割合が人間よりも大きいんだよ？

愛 そうなの？

田中 うん、そう。

由紀 これって結構とんでもないことだと思うんだけど。

田中 分かります。

愛 食いついた。

田中 少し話はそれるんですけど、最近、ニュースになっていて、深海

で発光現象が確認されたこと。

由紀 なにそれ？

田中 600〜1000m の深海に、活発な発光現象が見られることが最近分

かったんです。

由紀 ほう。

田中 しかも、そのパターンはとても複雑で、解析が全然追いつかない  
そうです。

由紀 それが、なんなの？

田中 クジラモドキはものすごく発達した発光器官を持っています。そ  
して、この発光現象は複数の発光源があることが確認されている。し  
かも、互いに共鳴するように呼応している。……これは、会話なん  
ですよ。

愛 会話？

田中 深海で、光を使って会話している生物がいるってこと！ 多分、  
これはクジラモドキが自分たちの発光器官を使って会話している証左  
だと思います。

由紀 ちょっと飛躍してる気がするけど。まあつまり、クジラモドキは  
互いに光を使って会話できるくらい、知能が高いって考えているの  
ね？

田中 はい。……そういうことです。

由紀 うん。思い入れは伝わってきた。

田中 ありがとうございます。

愛 本当にね。5年前のときだって、わざわざ野宿してまでクジラモド  
キを見に来たくらいなんだから。

由紀 野宿？

田中 や、それは成り行きなんですけど。

由紀 野宿って、え、どこ、その海岸？

田中 え？ ……そうですけど。

由紀 黄緑のテントの人？

田中 え……？

由紀 うそ……。

愛 知ってるの？

由紀 いや……でも。あなた田中……。

愛 由紀ちゃん？

由紀 スドウマミ。

田中 ！

由紀 知ってるのね？

愛 どうしたの？

由紀 ねえ。あのテント、そのスドウって人のテントだと思ってたんだ  
けど。

田中 はい、そうです。その人のテントで、僕はそこに厄介になってた  
っていうか。

由紀 ……。

愛 何よ？

由紀 いや……。ねえ、連絡先教えて。

田中 は？

愛 どうしたの？

由紀 後で連絡したいから、今教えて。

田中 え、でも……

愛 ちょっと。ちょっとちよつと！

由紀 なによ？

愛 田中君がびっくりしてる。

由紀 え、あごめん。

愛 なに？ どういうこと？

由紀 ……言わない。

愛 ええ？

由紀 ……もう、とにかく。

由紀は近くにある伝票に自分の番号を走り書いて田中に渡す。

由紀 これに連絡して。

田中 ……。

由紀 スドウさんについて、どうしても知りたいの。

田中 はあ。

由紀の勢いに2人は圧倒されている。

愛 ……ちよつとー、スドウさんって何者よ？

由紀 教えなーい。

愛 なによそれ。

由紀 あ、そういえば、この前送ってくれた引越祝い、飾ってるわ。

愛 あ、ああ。

由紀 部屋が大きくなって、殺風景だったから丁度よかった。

愛 ……そう。片付いたら上がらせてよ。

由紀 そのうちね。

愛 そう言つて、結局前の家も上がらせてくれなかったけどね。

由紀 大した家じゃないし。

愛 人に言えないペットでも飼ってたりして。

由紀 どうかしら。

田中 ……。

愛の携帯が鳴る。

愛 ああ。母さんだわ。

由紀 (うなづく)

愛 はい。(電話に出る) ……どうだった？ もしもし？ ……え、なんて？ ん？ 父さんがどうかしたの？ え、どういうこと？ なにそれ。いや、訳分かんないんだけど…。うん。…うん。え、でも何したの？ ……分かんないって。でもそんなおよぼどじゃない？ ……そうだね。うん。…わかった。えー。うん。うん。私もちよつとどうしたらいいか分からないけど。うん。大丈夫だから。…はい。…はい。分かったら。うん。連絡して。…はい。…はい。

愛は電話を切る。

由紀 ……なに？ どうしたの？

愛 ……。

由紀 ……ちよつと。

愛 ……警察に連れて行かれたって。

由紀 え？

愛 暴れるる父さんが何人かの警官に取り押さえられて出てきたって。

田中 え？

由紀 どういうこと？

愛 よく分からない。とりあえず、母さんも警察行ってくつて。

由紀 暴れるって。あの伯父さんが？

愛 うん。

しばし沈黙。

遅れて、緊急車両サイレンの音が聞こえ始め、近づき、そして離れていく。

3人は言葉をなくしている。

3

夜。

住居スペースに田中がいる。部屋着になっている。彼はスマートフォンをいじっている。

田中 ……。

部屋に愛がやってくる。抱えたお盆の上には、空の食器が重ねておいてある。

田中 どうだった？

愛 とりあえずご飯は食べたみたい。

愛はお盆を机の上に置いて、近くに腰掛ける。

愛 (ため息)

田中 ……お疲れ。

愛 ごめん。

田中 なにがあつたかくらい、教えてくれてもいいのよね。

愛 ね。

田中 ニュースとかも、それっぽいのはまだ出てないみたい。こういうのってどのくらいで記事になるのか分からないけど。

愛 うん。

田中 西崎先生からはなんか無かった？ 僕のほうは既読もつかないけど。

愛 (少しだけスマートフォンを覗き込んで) ……私も。

田中 そっか。

短い沈黙。

愛 私にさ。

田中 え？

愛 5年前、私に会ったことあるっていう話。

田中 うん。

愛 あれ。確かに本当なの？

田中 ……うん。間違いないよ。そのこ(自分の右耳の下辺りを指差して)にある、痣？ とか。覚えてるもん。今でもしっかり。

愛 ……。

田中 結構話したんだけどな。

愛 そうなんだ。

愛は田中をジーンと見ている。それからおもむろにスマートフォンの画面を開き、画像を開いて田中に渡す。画像には制服を着た少女が2人写っている。

愛 これ、5年前の私だけ。この子？

田中 ……ああ、そうだよ！ やっぱりそうじゃん！

愛 どっちの子？

田中 は？ いや。こっちの三日月さんの方だよ。金髪じゃない方。

愛 ……それ、左の金髪が私なんだけ。

田中 へ？ え？ （見比べて）この、眉毛のない方？

愛 剃り過ぎたの！

田中 え……うそお。

田中は愛と画像を見比べる。

田中 三日月さんはこっちのヤンキー。

愛 ……。

田中 ……というほどでもない、少しやんちゃな高校生。

愛 うん。

田中 じゃあ、これは誰？

愛 双子の姉。

田中 え？

愛 私たち双子だったの。

田中はスマートフォン画面を操作し、拡大したり動かしたりして、  
写真を仔細に眺める。

田中 そう言われたら、本当に同じ顔だ。

愛 ……その子で間違いないんだね？

田中 うん。この子だよ。

愛 そうか。

田中 え……。じゃあ、僕は優子さんに会ったのか！ うわ。めっちゃ

や人違いじゃん！ 恥ずかし！ 三日月さんも早く言ってくれたらいいのよ。性格悪いよ。

愛 ……。

田中 ん？

愛 ……もういないよ。

田中 ……え？

愛 亡くなったの。

田中 へ？

愛 ……。

田中 え、どうということ？

愛 5年前、集団自殺。

田中 うそ……

そして沈黙がある。2人は何も話すことができない。

おもむろに2階で、重いものが落ちたような大きな物音がする。ガラ

スの割れる音も。くぐもった人の喚き声のようなものも混じる。

小百合がどうやら部屋で暴れているようだ。

田中 ……。

愛 優子がいなくなってから、時々ああいうふうになるの。

田中 ……。

愛 だから放っておいて。後で見に行くから。

田中 ……なんで。

愛 え？

田中 何が動機だったの？

愛 ……。

田中 確かに、少し思いつめてることがあったみたいだけど、ストウさんとも話して、ちよつとずつ元気になつてる感じだったんだ。

愛 そう……。

田中 やっぱり、だから信じられないよ。

愛 ごめん。

田中 いや……。

田中は愛を見つめている。

愛 ……なに？

田中 いや……ごめん。その……。

愛 ……。

田中は愛に優子の姿を重ねていたのだ。

愛 ……私、ちよつと上の様子見てくる。

田中 うん。

愛は部屋を出て行く。

田中は愛が出て行った後を見つめているが、視線を元に戻す。

田中 ……。

波の音がする。

田中 くそ。そんなこと……。

しばらくして、愛が走りこんでくる。

愛 ……。

田中 どうしたの？

愛 母さんがいない！

田中 え？

愛 二階の窓から出て行ったみたい。

田中 どこに？

愛 さあ。

田中 携帯は？

愛はスマートフォンで電話をかける。

愛 (耳に当てたまま) 出ない。

田中 でも物音が消えてからそんなに時間経ってないよ。まだ近くにいらんじやない？

愛 探してくる。

田中 僕もいくよ。

愛 ありがと。

2人は外に出て行く。



2時間後。  
部屋には由紀がいる。

由紀 ……。

田中が外から帰ってくる。

田中 ……どうも。

由紀 電話番号役に立ったわね。

田中 ええ。

由紀 愛と伯母さんは？

田中 2人だけで話すって。

由紀 そう。しかし伯母さんまで研究所で何しようとしたのかしら？

田中 入る前に見つけられてよかったです。

由紀 確かに。同じ日に夫婦別々で逮捕とか笑えないよね？

田中 本当に笑えません。

由紀 ……ごめんて。

短い間。

由紀 で？

田中 ……。

由紀 2人が帰ってくる前に話しちゃいましょうよ。

田中 優子さんは、なんで自殺したんですか？

由紀 ー？

田中 教えてくれたら、僕も知ってること言います。

由紀 何で君がそんなこと知ってるの？

田中 愛さんから聞きました。

由紀 愛から？

田中 はい。

由紀 へー、あの子が。

田中 どうですか？

由紀 取引しようとしてるんだ？

田中 ……そうです。

由紀 どうしようかな。個人的なことなだけだな。

田中 僕、5年前に優子さんに会ってるんです。

由紀 え？

田中 さつき分かったんですけど。僕、ずっと三日月さん、あ、えーつと愛さんだとばかり思ってた人が、優子さんだったってさつき分かって。その人と、その…：自殺する前に結構話す機会があって、その

時にはとてもそんなことするようには思えなくて。確かに悩みはあつたのかもしれないけど、なんていうか、意外というか、ショックで。

別に知ってどうにかなるわけでもないんですけど。

由紀 ……ただ興味本位ではないと。

田中 もちろんです！

由紀 ……。

田中 ……。

由紀はしばらく田中を見つめている。田中は由紀を見つめ返す。

由紀 ……あのね。あの子達、本当の双子じゃなかったの。

田中 へ？

由紀 似てるけど、双子じゃなかったの。生物学的に。

田中 どういうことですか？

由紀 遺伝子が一致しなかった。それも完全に不一致。赤の他人。分かったのはあの子達が15歳の時。5年前の、クジラモドキが打ち上げられるより少し前くらい。

田中 でも、写真見せてもらいましたけど、どう見たって双子って言うか、他人なんて考えられない。

由紀 だから2回も検査したんじゃない。結果は同じだったけどね。

田中 検査って？ 何でそんなことしたんです？

由紀 さあ。出来心つてのが一番近いんでしょうけど。二人とも気味悪がつてたのよ。自分たちがあまりにも同じだから。あのね、愛はここに痣があるんだけどね、実はまったく同じ場所に……

田中 知ってます。

由紀 え！（両手で自分の胸元を隠す）

田中 ちが！ 何もしてませんよ！

由紀 ふーん。どうだか。それで当時、はやり始めてた遺伝子検査、面白半分を出してみたのよ。軽い気持ちでね。でも結果は真っ黒。頭は真っ白。取り乱して当時研修医だった私に連絡してきたの。

田中 ん？ 樋口さんって医者なんですか？

由紀 言ってなかったかしら？

田中 えー。

由紀 なによ？

田中 いや……。つまり、2人は同じ顔をした他人ってことですか？

由紀 そういうこと。

田中 ドッペルゲンガー。

由紀 出会ったらどっちかが死ぬっていうやつ？

田中 あ……いや。

由紀 ま、あながち間違ってるわいよ。

田中 ……？

由紀 結局、お互いに自分のアイデンティティを再構築できなかつたんだから。

田中 じゃあ、それで優子さんは？

由紀 遺書も何も無いから、分からないけどね。

田中 そうですか。

短い沈黙。

由紀 私はね。はっきりさせて、色々ちゃんとした方が良かったのよ。

田中 はっきりっていうのは？

由紀 どっちが伯父さんたちの子なのか？ どうしてそういうことになったのか？ もしくは、両方違うって可能性だってあるわけだし。

田中 それはきつくはないですか？

由紀 しようがないでしょ。

田中 そうですけど……。

由紀 なんでみんなそうなの？ そういう風にうやむやにしてるから結局最後首が回らなくなるんじゃない。

田中 でも勇気いりますよ。

由紀 逃げてるだけよ。傷つきたくないから。メリットデメリットで考えたら、向き合った方がいいに決まってるのに。

田中 それは分かりませんよ。

由紀 なぜ？

田中 真相が分かったら、今まで築いてきたものが、全部崩れてしまうかもしれないんですよ？

由紀 もう崩れてるじゃない？

田中 崩れてません。まだ憶測の域です。

由紀 気持ち悪い。

田中 頑張れって思うじゃないですか？

由紀 は？

田中 今にも倒れそうな人がいて、でもどうにか踏ん張ってバランスとってたら。

由紀 倒れてからやり直せばいいのよ、

田中 倒れたら二度と立ち上がれないかもしれない。

由紀 無理を続けてたら、立ち上がる体力すら使い切ってしまうかもしれない。

田中 ……。

由紀 ……もういいかしら？

田中 へ？

由紀 交換条件。

田中 ああ……。結局、真相はよく分からないってことですね？

由紀 そういうこと。

田中 ありがとうございます。

由紀 じゃ、知ってること話して。

田中 どんなことを知りたいのかよく分かりませんが……。樋口さん、あの光何色に見えました？

由紀 え、なに？

田中 発光現象の光ですよ。

由紀 ええ？ ……白色。

田中 ですよ。僕もです。

由紀 ？

田中 だけど、スドウさんはその光が、見たことも無い複雑なモザイク模様に見えたそうです。

由紀 どういうこと？

田中 眼の構造が、常人とは異なるそうです。

由紀 え？

田中 あの人は高校の先生らしいんですけど、大学院で学位まで取られていて、その研究内容が、自分の目の構造解析だったそうです。

由紀 ふむ。

田中 英語論文にもなってるので、後で調べてもらったらいいんですけど、それによると、色を感じることが出来る錐体細胞という細胞が、通常の人間では3種類、ごく稀に4種類であるのに比べて、スドウさんの目では6種類の錐体細胞が認められたということでした。これは、どういうことかという点、人間は色の3原色で構成された視覚の中で生活しているわけですが、スドウさんのような人間は、6原色で構成された視覚を有するという点になります。

由紀 色の洪水じゃない。

田中 そうです。実際、彼女は高校生ときに突然世界の見え方が変わって、当時は相当戸惑ったということでした。

由紀 そりゃそうでしょうね……。

田中 それで、あの人がいわく、おそらく葦ノ浦の発光現象に集まってきている人たちというのは、おそらく自分と同じような眼を持つ人たちなんだろうって、言っていました。

由紀 どういうこと？

田中 5年前、あの発光現象って、この辺りの誰かが、撮った動画をNSで拡散して、それが全国ニュースでも報道されて有名になったんですよね。

由紀 そうだったかな？

田中 そうですね。で、スドウさんもテレビで初めて発光現象を見たそうですね。なんですけど、その時に何かスイッチが入ってしまったんだそうです。

由紀 スイッチ？

田中 はい。よく分からないんですけど、なんとなくでもそれを見たいという衝動？ もしくはもっと根源的な、火に飛び込んでいく夜の虫みみたいな感じでしょうか。

由紀 ふむ。

田中 スドウさんはこうも言っていました、あの謎の光は、おそらく何かのメッセージなんだと思うって。いや、それよりももっと強い、命令だって。特殊な目を持った人間にだけ伝わる、シグナル。

由紀 ……。

田中 全国からたくさんの方が、あの光を見るために葦ノ浦に殺到した。多分それは、スドウさんと同じように、映像によって拡散したシグナルを受け取った人たちが集まってきたんじゃないかって。

由紀 そんなこと……。じゃあ、その集められた人たちは、結局最後みんな自殺するの？ そういうシグナル？

田中 そうですね。

由紀 スドウマミも？

田中 三日月優子も。

短い沈黙。

由紀 どういうことなの？

田中 ……スドウさんが言ってたんですが。

由紀 ええ。

田中 自分は、親が誰か分からないんだと言っていました。育ての親は自分を保護してくれた人で、血の繋がりは無いと。

由紀 うん。

田中 この目は突然変異かと思っていたけど、葦ノ浦に集まった人間がこんなにいるところを見ると、どうもそれも違うらしい。自分たちは、人間とは少し違う、別の生物なのかもしれないって。

由紀 いい年して、中二病じゃない。

田中 まあ、酒呑みながらの話だったから、冗談かと思ったんですけど。

由紀 ……なにによ？

田中 クジラモドキの赤ちゃんだって、人間とそっくりじゃないですか。

由紀 ……。

田中 そもそも、クジラモドキが一時メディアに取り上げられたのだから、解剖した死体から、人間の胎児そっくりの子供が大量に出てきたからですよね。

由紀 そうだけど。…え、じゃあ、あの人たちはみんなクジラモドキだったの？

田中 そうは言ってません。だけど、人間以外にも人間のような外見をした生き物というのが、世の中には意外といるのかもしれない。

由紀 またも論理が飛躍しているような気がするけど……。

田中 そうですね？

由紀 なるほど。でも興味深かったわ。

田中 ありがとうございます。

由紀 ま、私が聞きたかったこととは、全然違ったけど。

田中 え……そうなんですか？

由紀 うん。……ねえ、その。……ストウマミって子供はいたのかしら。

田中 え？

由紀 というか、子連れではなかった？ 生まれたばかりの赤ん坊。

田中 いるわけじゃないじゃないですか。

由紀 本当に？

田中 だってキャンプしてたんですよ？

由紀 そうよね……。

田中 え？ はい。

由紀 ……そう。……そうか。

ドンドンドン。ドアをノックする音がする。

由紀 ……。

由紀は思索に沈んでいる。

ドンドンドン。

田中 あの……。

由紀 はい！ どうぞー？

ドアが開く。そこには、西崎が立っている。

田中 西崎先生！

西崎 あれ？ 田中君。朝は本当にごめん。さっきライン見た。

田中 ああ。いえ。

西崎 三日月さんのお母さんは帰ってる？

田中 え？ 2人とも外ですけど。

西崎 外出中？ まだ警察？

田中 いや。一回帰ってきて……というか、研究所の近くのバス停で休んでましたけど。

西崎 うそ？ 全然気づかなかった。

田中 色々あって、少し取り乱してるみたいです。

西崎 ……そう。

由紀 2人がどうかしたんですか？

西崎 あ。確か三日月さんの従姉の。

由紀 そうです。

西崎 お久しぶりです。えーっと……なにか聞かれていますか？

由紀 何のことです？

西崎 ……うん。明日の朝には公表されると思うんですが、今日、海繭からクジラモドキが孵化しました。

田中 え！

由紀 本当ですか！

西崎 はい。今日の早朝のことです。

田中 凄いいじゃないですか！

西崎 ああ。

田中 生きてるんですか？

西崎 まあね。

田中 すごい！ すごいです！（大興奮）

西崎 ……でも、出てきたのはそれだけじゃないんです。

由紀 ん？

短い沈黙。

西崎 人の遺体のようなものが一緒に見つかりまして。

田中 え？

由紀 人の遺体？

西崎 そうです。

由紀 どういうこと？

西崎 おそらく海繭の中に一緒に入っていたんだと思います。

由紀 そんな。

西崎 それで、その遺体というのが、どういうわけか愛さんにそっくりで。

由紀 え？

西崎 第一発見者が、当直していた三日月さんのお父さんだったんですが、おそらくそれを見て動転されたんだと思います。

由紀 朝の……。

西崎 はい。お母さんが警察から返ってこられたら、迎えにあがろうと

思ってたんですが。こっちもバタバタして……。

由紀 すぐに行きましょう。

西崎 はい。

3人は出口に向かう。

5

同室。深夜。

愛がいる。疲れているようだ。

愛 ……。

しばらくして、田中が現れる。

コンコン。

田中 来たよ。

愛 悪いね。休んできたよ。

田中 ううん。まだ起きてたし。

愛 母さん、大丈夫？

田中 だいぶ落ち着いたかな。樋口さんがいてくれるみたいだし。

愛 そうか。

田中 三日月さんこそ、大丈夫？

愛 うん……。まあ……。色々あったよね。

田中 心配だよ。

愛 ありがとう。

田中 うん……。

短い間。

愛 でも、ちょっとホッとしてるよ。

田中 え？

愛 ちゃんと身体が返ってきてくれてさ。

田中 ずっと見つかってなかったんだね。

愛 うん。この辺、海流がきついのもあって、あの事件の、誰も見つかってないんだよ。

田中 知らなかった。

愛 ずっと宙ぶらりんだつたから。遺書も無かったし。私が目撃者ってだけで、他に情報があるわけでもなくてさ。いろんな人にその時の話を聞かれて。でも話せば話すほど、私もどんどん自信がなくなっていくんだよね。私が見たものは本当だったのかな、とか。優子は実はどこかしらない場所で生きてて、ただ演技で死んだことにしたかったんじゃないか、みたいな。生きてるかもしれない。だけど間違いなく飛び込んで。その水音も聞いて。生きてるはずない。ずっとグルグルしてた。なんかね、はっきり決められないって本当にきついなって思ってた。誰でもいいから、本当のことを教えて欲しかった。手がかりでもいい。何かヒントだけでも。

田中 ……。

愛 それで今日、田中君に話を聞きたかった。優子は飛び込む前に誰と会って、何の話をしたのか。なんかさ、まさかだよな？ なんてそんなところから出てくるのよって。父さんなんて、毎日そこに通ってたんだよ？ 私たち、ずっとふわふわした状態で、この5年間、あの夜はなんだったんだらうって思いながら生きてきたのに。

田中 ……。

愛 あのさ、教えて欲しい。事件の直前に、どんなことを話したのか。優子が何考えてたのか。なんでもいいの。些細なことでもいい。だからお願い。それから、私たち2人なんだけど実は…

田中 あそれは…。

愛 え？

田中 さっき聞いちゃった。

愛 誰から？

田中 えー…。

愛 あいつ…、本当に口軽いな。

田中 いや。今回は樋口さんだけ悪いんでもないんだけど…。

愛 え、なに？

田中 ううん。とりあえず、それを踏まえて。話すね？

愛 うん。

田中 ……その、ストウさんって、普通の人の目とは全然構造の違う眼をしてたんだって。

愛 え、どういうこと？

田中 全然見えてる世界が違うってこと。これは見えない人間には説明できないことなんだけど、モノクロ写真とカラー写真くらいの違いがあるって言うっていた。高校生くらいのときに急にそんな風になったらしくて。最初は色の洪水で慣れなかったけど、慣れてしまうと世界がどれだけ美しい色で満ち溢れているか。1つの景色の中に、名前のついていない色を幾つも見つけることができる。僕らは主にそんな話を聞いてたんだよ。

愛 うん…。

田中 それで、そう。君にもその素質があるかもしれないね？ って言うっていた。優子さんの目を覗き込んでさ。

愛 そうなの？

田中 うん。ストウさんって、そういう特殊な目の研究をしてた人なんだよ。

愛 ふーん。

田中 ああ。それに、もしかしたらスドウさんの出生にも魅かれたんじゃないのかな？ そのスドウさんは孤児で、自分の親が誰だか分からないんだって。保護した人が、そのまま親代わりで育ててくれたらしいんだけど、そんな話もしてくれたから。

愛 なるほど。

田中 ……そのくらいかな。もうだいぶ前のことでそこまで詳しく覚えてないんだけど、そんな感じだった気がする。

愛 ……それだけ？

田中 え？

愛 ちよつと思つてた感じと違つたと思つて。

田中 というと？

愛 なにか酷いことを言われたのかと。むしろそれがきつかけだと思つてたから。

田中 それは違うよ。だつてスドウさんの話を聞いて、彼女はちよつと救われましたつて言つてたもの。当時僕は何のことか分からなかつたけど。

愛 そうなのか……。

愛は黙つて考え込んでいる。

田中 あのさ。僕にも教えてくれないかな？ 事件の時、どんなことが起こつたのか。

愛 ……。

田中 もちろん。無理には言わないけど。

愛 ……。

田中 ……。

愛 事件の前の日の晩に優子が帰つてきた時、ちよつと様子が変だつたんだ。頭痛がするつて言つて。それでじゃあ休んどきなよつて、その日はすぐ寝ちゃつたんだけど。次の日もやっぱり調子悪いつて。朝からずつと寝てて、夕方になつてようやく起きてきたの。ああ、そういえばやたら眩しがつていた気がする。いつもと空が違う色に見えるつて。なに言つてるのつて、全然相手にしなかつたけど。

田中 ……。

愛 あの頃の葦ノ浦つて、本当にたくさん、わけの分からない人たちが来てて。平日なのに仕事休んで、遠いのなんて北海道からつて人までいた。うちの民宿も歴代で一番お客さんが入つて、なんだか異様な雰囲気だつた。

田中 本当に全国から人が集まつていたみたいだね。スドウさんもその一人だつたんだけど、どうしても抗えないような感情が、あの光を見ていると巻き起こるんだつて。よく分からないけど、故郷つて言うか、その光のある場所に帰りたいつて。

愛 帰りたいつ？

田中 うん。そう言つていた。あのね、スドウさんの目には、あの光は教会のステンドグラスみたいなモザイクのように見えていたんだつて。

愛 モザイク。

田中 それは美しいんだつて。そして強烈に惹きつけられる。ここに泊まつてた人たちもそんなじゃなかつた？

愛 そういえば、お客さんで凄い真面目そうなオジサンがいて、今まで一度も仕事を休んだことがないのに、初めて有給使っちゃいましたつて。

田中 なにそれ。



愛 その人は銀行かなんかの職員なんだけど、ニュースでたまたま葦ノ浦の発光現象を見て、なんとしても、ナマでこの現象を見たいって、わざわざやってきてみたい。

田中 似てるね。

愛 そうだね。

田中 ごめん。話がそれた。

愛 ううん。

少しの間がある。愛は思いをめぐらす。

愛 あの日。……あの日。優子はずっと変だったの。食事の時もなんかとても眩しそうで。民宿は忙しかったから、私たちは2人きりでご飯を食べて。そしたらそう、昨日みたいに窓の外がまたずっと光っていた。優子はそっちらばり見えていて。あんまり見えているから私も一緒にそれを眺めて。

そしたら優子が、行こうって言ったの。どこへ？ って。多分分かるから。大丈夫。いつの間にか、表情はとも元気になってた。優子に言われるまま家を出て。そしたらね、ちらほら同じ方向に歩いていく人影が見えるの。まるで神社の夏祭りに、町の人たちが思い思いに向かっていくように。でも、本当にそんな感じだった。みんなどこか楽しげで、浮かれている。

わたし怖くなってきた。でも優子はぐいぐいと手を引っ張っていくの。歩きながら、話してくれた。私、今少し変かも。だけど、半分はすごくまともだから。ねえ愛、わたしたち、こんなに同じ顔なのに、

体も何もかも一緒なのに、双子じゃないんだね。私たち、じゃあ一体なんだろう。他人？ でもそうはもう思えないよ。むしろ、双子じゃないって分かってからの方が、愛を近く感じる。なんだろう？ 不自然だから余計に私のように思えてくる。分かる？

わたし、さっぱり分からなかった。やっぱまともじゃないよって思った。けどね、あれから何年もずっとそのことを考えてたら、ちょっとそうかもって思うことがあった。なんかさ、多分、私たちは双子になっていったんだと思う。気づかないうちに。それってさ、結構すごいことだと思わない？ 2人で自然に逆行してるんだよ？ どういう原理でそんなことが起こるのか知らないけど、ある意味究極の関係だよ。優子は多分、そういうことを言いたかったんじゃないかと思う。

それでね。私たち気がいたら灯台にまでやってきていた。灯台知ってる？ 結構遠いんだけどね。

田中 知ってるよ。ニュースで何度も見た。

愛 そうか。そう。あの場所だよ。灯台下暗しっていうように、結構真っ暗なの。どのくらい人が集まっているのか分からない。けどサーチライトが通り過ぎるたびに、心霊写真みたいにそこかしこに人がいる。

発光現象はここでは今まで以上に明るかった。その時までわたしあれは空が光ってるんだと思ってたの。でも違った。あれは海が光ってるの。その光が空に反射して、ああいう風に見えてたのよ。綺麗だった。

た。光が海の中を、流星や火の玉のように駆け抜けていく。すごいと思っただ。

私見とれていたのね。優子が泣いているのに気づかなかった。気づいた私に優子はすごいねって言って。行こうって言った。私びっくりしてしまっ。行こうってどういうこと？ っ。優子はやさしく笑っていて、完全になろうって言った。意味は分からないけどすごく刺さった。なんかもういいかって、その時思った。そうだねって。私と優子の目が合った。

その時、最初の水音がした。

最初なんだろうと思って。波が砕けた音かなって。だけど妙に引つかかる音で。その時光が走った。男の人の背中が見えて、それが崖の向こうの暗闇にポーンって。遅れて水音。あっちでもこっちでも。海が激しく光っている。私の手が引かれる。優子が、走り出す。崖へ。優子の呼吸がすごく伝わってきて、高揚が血管でつながっているみたいにどくどくと流れ込んでくる。行くよ！ っ。踏み切るタイミンが分かる。優子が思い切り地面を蹴る。

私は手の平を開いている。

今までかかっていた力が一気に解放されて、私は膝をついてしまっ。え！ っ。優子が振り向く。最後にもう一度目が合う。しっかりと。サーチライトがそれを照らす。一瞬のこと。闇が来て、水音がする。

……

気がついたら辺りは真っ暗で。星や町の明かりを吸い込んだ空が、ほんの少し海より明るい。私のうずくまっている地面は漆黒で。空よりも、海よりも暗くて。ときおり焼けたように辺りが白くなる。サーチライトが通り過ぎる。もう誰もいない。ここには誰もいない。私には分かる。みんな海へ溶けてしまった。恐ろしくて。とにかく恐ろしい。

町中の旅行者がいなくなってしまったので、不審に思った町の人たちが私を見つけてくれた。私は助けられるまで一步も動けなかった。飛び込んだ人たちの遺体は、誰一人見つけられなかった。まるで、ブラックホールにでも吸い込まれてしまったように、みんな消えてしまった。

後はニュースのとおりよ。一体、何人の人が飛び込んだのかも、正確な数字は分かかっていない。だけどあの光を見に葦ノ浦を訪れた人は、みんな行方不明のまま。そして今日、優子の遺体が、海繭の中から見つかった。

田中 ……

波の音が聞こえてくる。そのくらい、2人の沈黙は深い。

愛 そんな感じかな。

田中 ……。

愛 結局、優子がなんで飛び込んだのか、正直今でもよく分からない。

まあ、他の人たちにしたってそうなんだけど。

田中 スドウさんも、次の日の朝、僕が起きたときにはいなくなっていた。荷物や全部そのまま。随分探したんだけど。

愛 酷い話だよ。

田中 え？

愛 私は裏切り者なんだよ。手を離してしまった。あの子をこっちに引き戻すことだってできたのに。

田中 それは違うよ！

愛 どうかな。

田中 違うよ。

愛 闇の中で一人残されて、私はすごく後悔した。そのまま溶けてしまいたかった、暗闇に。だけど、立って後を追うことはしなかった。

田中 三日月さん……。

沈黙。

部屋の入り口に、小百合が姿を現す。

小百合は2人を見つめている。2人はしばらく小百合に気がつかない。

愛 !

愛が小百合に気がつき、驚く。

愛 母さん！

小百合 ……。

愛 なに？

小百合 知ってたの？

愛 なんのこと？

小百合 今、由紀ちゃんから聞いて……

小百合の後ろから由紀がゆっくりと現れる。小百合はおびえたように由紀から離れる。

愛 由紀ちゃん……え、どういうこと？

由紀 もう2人は知ってるよって言うても信じてくれないんだもん。だから確かめてみればって。

愛 ばらしたの？

由紀 話の成り行き上、仕方なくよ。

愛 あんたねえ！

由紀 もう私もあんま待てないのよ。

愛 はあ？

小百合 愛、知ってたの？

愛 ……うん。

小百合 いつから？

愛 ちょうど、5年前。私たちで検査に出したの。

小百合 5年前って？

愛 クジラモドキが打ち上げられる少し前。

小百合 うそ……。

愛 違うよ！ 母さん！ 分からないんだよ。確かに私たちショックだったけど、2人で話して一生抱えていこうねって、約束してたんだから！

小百合 でも、じゃあ優子はなんで？ そもそも、なんでそんな検査を？

愛 それは……（口ごもる）

由紀 気味悪かったからでしょ？

愛 な。

由紀 何もかも完全に一緒だから。双子って言うより、コピー。スキヤンしたように、自分と同じ姿かたち。そう言ってたじゃない。

愛 由紀ちゃんあんた……

小百合 それなら早く言ってくれば……

愛 言う気なんてなかったでしょ！ 聞いて欲しかった？ 本当の子供はどっちって。

小百合 ……

愛 色々考えちゃうよ。こんなに大きくなるまで黙ってたなんて、よっぽど酷い理由があるのかなって。優子と2人、どれだけ怯えていたか。検査結果見たときの、私たちの気持ち想像できる？ 今まで信じてた地面が、全部崩れ去ってしまうような。立ってられない。今まで疑うことすらなかった人を、全然信じられなくなるんだよ？ ねえ、

そんなことが娘に起こってたって、想像したことあった？ 優子もいなくなってる。私一人、どんな気持ちで今までいたか、少しでも考えた？

小百合 それは……違うのよ、つまり……

愛 やめてよ！ ばれたから今度は話すの？ 今までずっと騙してきたの？ 分からなきゃ、一生そうするつもりだったのに？

小百合 許して、愛。これは……

愛 だから、ずるいんだって！ 謝るようなことならしないでよ！ っ所開き直って、大したことないって、何で言ってくれないの？ もういいから！ どんな言い訳も聞きたくない！ 誰の子供なのかとか、どんな理由とか、なに聞いたって納得できないから！ 気持ち悪いのよ！

小百合 海で拾ったの！

間。

愛 ……は？

由紀 ……

小百合 あなたの生まれた日よ。その日に、優子を砂浜で拾ったの。

愛 なに言ってるの？

小百合 頭がおかしくなったと思われるかもしれないけど、本当なの。

優子は、その砂浜で拾ったの。お父さんに聞けば分かるわ。

愛 ある訳ないじゃん。そんなこと。

小百合 あったのよ。その時だって、やっぱり五年前みたいに空が光ってた。

愛 ……

小百合 呼ばれたような気がしたの。私はちょうど臨月で。あなたがお腹の中にいた。ふと子供の泣き声が聞こえたような気がして、外に出たの。変な夜だった。音もなく空が光っていて。遠くの雷かと思っただ。そしたらに風に乗って本当に子供の泣き声が聞こえてきた。不思議なんだけど、全然怖くなくて、むしろ行かなくちゃって。私が呼ばれてるような気がして。

愛 そしたら赤ちゃんが落ちてたの？

小百合 そうよ。しかも臍の緒までついてた。

愛 誰かがそこに産み落とした？

小百合 分からない。でもそこに人の気配はなかったし、私には赤ちゃんしか見えてなかった。もう吸い込まれるように抱き上げて、その時には私が育てようって思っていた。それ以外ありえない。この子は自分が授かったものなんだって。

愛 本当に？

由紀がぐらりと体勢を崩し、何かにぶつかって大きな音がする。

由紀 ……。

愛 ？

由紀はどこか悄然として、そのまま出口へ向かう。

愛 ちょっと？

由紀 ……。

由紀はそのまま出て行ってしまふ。

愛 待ちなさいよ！

小百合 放つときなさい。

愛 でも……。

田中 あの……僕行こうか？

愛 え？

田中 うん。

田中は由紀の後を追って、出て行く。

2人は急にその場に2人きりになる。

沈黙。

愛 本当なの？

小百合 本当よ。

愛 どうして今まで黙ってたの？

小百合 だって……。言ったら信じてくれた？

愛 ……。

小百合 それに、怖かったのよ。特に優子に、誰が親なのかも分からない。いってことを伝えるのが、どう考えたって下手な嘘にしか聞こえない。

愛 ……そうかも。

小百合 ごめん。だけど、こんなの全部言い訳。

愛 ……。

小百合 ばれる訳ないって思い込んで、2人のこと全然見れてなかった。

愛 ……。

小百合 それどころか、あなたを1人にしてしまった。

愛 ……。

小百合 ごめんね。

愛 ……。

小百合 わたし、こんなに傍に自分の子供がいたのに、なにも見えてなかった。

2人は引き寄せられるように抱き合い、互いを確かめ合う。

小百合 優子を拾った直後に陣痛が来たの。まだ予定日まで2週間くらいあったのに。だからね、優子と愛は、本当に誕生日が同じなの。

愛 それは本当なんだ。

小百合 そうよ。

愛 父さんは何も言わなかったの？

小百合 ええ。反対されると思っていただけ、彼も受け入れてくれたわ。

愛 へえ。

小百合 ずっとずっと、言おう言おうと思っていたの。早く言わなきゃって。だけど、どんどん似ていく2人を見てたら、私たちまで本当に双子なんじゃないかと思ってしまった。

愛 怖くなかったの？

小百合 ー。(少し考えてから) 怖いとは思わなかった。むしろ、これなら誰にも怪しまれないって、変な安心感かな。

愛 酷い。

小百合 そうね。もちろん……ずっと引かかってはいたの。この子は一体誰なんだろう。絶対血は繋がっていないのに、何でこの子達は同じ顔なんだろうって。

愛 どうしてなの？

小百合 さあ。

愛 ……。

小百合 ……ただ1つだけ、心当たりがある。

愛 え？

小百合 5年前にね、クジラモドキが打ち上げられたでしょ？

愛 うん。

小百合 あの時、クジラモドキのお腹から出てきたクジラモドキの子供が、人間の赤ちゃんにそっくりだった。

愛 うん……。

小百合 私たち、それを聞いた時初めてぞっとしたの。

愛 ……。

小百合 私たち、もしかしてこれを拾ってしまったんじゃないかって。

愛 そんな。

小百合 父さんが漁師を辞めて、研究所に勤めたのも、あの海繭をもつと調べたかったからなの。

愛 そうなの？

小百合 ええ。だって、残された優子のヒントって、海繭しかなかったのよ。

愛 そうか。

小百合 だから今日、あの人が帰ってこなかった時、なにかあったんじゃないかって恐ろしかった。

愛 じゃあ、父さんは朝、水槽の中で優子を見つけたんだね。

小百合 そうよ。どれだけ悔しくて悲しかったか……。私も、あんなにやせて、真っ白になった優子……。5年ぶりに、やっと顔を見れたけど。見れば見るほど可哀想で。

愛 ……母さん。優子のあの身体って、あれは食べられたからあんなったの？

小百合 分からない。下半身は膜の一部と繋がっているようにも見えたけど、どういうことなのか見当もつかない。

愛 そうだよな。

小百合 まだ、お父さんも警察から帰ってこないし、私もまだうまく受け入れられてないけど。3人揃ったら。もう一度ちゃんと会いに行きましようね？

愛 うん。

小百合 家族4人、揃って。

愛 ……うん。

田中が申し訳なさそうに、帰ってくる。

田中 ……。

愛 ああ。おかえり。

田中 ただいま。

愛 由紀ちゃんは？

田中 引き戻そうと思ったんだけど、投げられた。

愛 え？

田中 申し訳ない。

愛 ああ。あの人そういえば剣道やってたんだった。

田中 ええ！

愛 ごめんごめん。

田中 言ってよー！

愛 あの人、加減できないから。

小百合 悪気はないのよ。

愛と小百合は、ようやく笑い合えたかのように、笑っている。

6

2週間後。

部屋は通夜の後なのか、散らかっている。

優子の身体を入れた棺桶が、座敷に置かれている。愛は、部屋を片付けている。

愛 ……。

扉が開き、喪服姿の西崎が現れる。

西崎 ああ。三日月さん。

愛 先生。

西崎 遅くなっちゃってごめん。

愛 いいえ。そんな。

西崎 うちの施設の者は明日来ると思うんだけど、早く来たかったから

……。

愛 ありがとうございます。

西崎 いや。

西崎は上がってきて、優子の遺影に手を合わせる。

西崎 ……。

愛 ……。

西崎 ありがとう。

愛 いいえ。

西崎 お母さんは？

愛 奥。呼んで来ましようか？

西崎 ああ。いやいや、いいの、いい。

愛 色々ありがとうございます。

西崎 え？

愛 お葬式ができるように、色々と動いてくれたって聞きました。

西崎 いやいや。そんな大した事してないよ。むしろ今まで協力しても

らって、本当に申し訳なかったと思うし。

愛 そう言ってもらえると……。

西崎 三日月さんは大丈夫なの？

愛 ……うん。なんとか。

西崎 そうか。

愛 先生も忙しそうですね。

西崎 もう滅茶苦茶だよ。しばらくはしょうがないけどね。

愛 クジラモドキは元気なんですか？

西崎 うん。生きてはいる。だえど、彼らが何を食べるのかもよく分か

らなくて、試行錯誤しているところ。

愛 そうか……。

西崎 ……あの。……解剖の結果、知りたい？

愛 ……。分からないです。

西崎 え？

愛 そりゃ知りたいですけど。だけど怖い。もし、本当に優子がクジラ

モドキだったら。人間でなかったら。私はそれをどう受け止めたらいい

いんだろうって。

西崎 ……そうだね。

愛 何か分かったんですか？

西崎 ……この場合、幸いというのか。本当にまだ何とも言えないんだ。初めてのことが多すぎてね。僕らも全然ついていけないというか。だから、報告にはまだもう少し時間がかかると思う。

愛 そうですか。

西崎 ……じゃ、明日また来るので。

愛 あ、ちよつと待って。

西崎 ん？

愛 粗品だけ。すぐ持ってきますから！ それからご飯もまだですよ

ね？ 余りものなんですけど、よかったら持って行って下さい。

西崎 え？ そんなお気遣いなく。

愛 すぐ持ってきますから。

西崎 ああ。

愛、部屋の奥へ消える。

西崎 ……。

西崎は遺影を見つめている。

そこへ、由紀がやってくる。

由紀 待ってましたよ。

西崎 え？

由紀 来るんじゃないかと思ってたけど、よかったです。

西崎 どういうことですか？

由紀 とりあえず。家の人は？

西崎 すぐ戻ってくると。



由紀 そうですか。  
西崎 ええ。

少し沈黙がある。

由紀 ……時間がないし、少し手伝ってもらえますか？

西崎 は？

由紀 いいから。

西崎 何をするんですか？

由紀は西崎に返答せずに、持っていたかばんを開け、白衣を取り出してそれを着ると、さらにゴム手袋を引っ張り出しはめる。

由紀 どうぞ。

西崎にも手袋を一組渡す。

西崎 え？

由紀は、デイスポールサルの細いメスト、ホルマリンの入ったプラスチックのビンを取り出し床に置く。

由紀 早くして。それ。

西崎 は、はい。

由紀 じゃあ、開けますよ。そっち持ってください。

由紀は棺桶の蓋に手をかけ、西崎にも手伝うよう指示を出す。

西崎 ちよつと。一体何をするんですか？

由紀 まずは確かめないと何も言えないから、早くしてくれる？

西崎 ……。

西崎は言われるがまま蓋に手をかけ、2人でそれを開ける。

中には愛と同じ顔の優子が横たわっている。しかし、全体的に腐敗は進んでおり、顔は赤黒い斑点が浮いている。

優子も西崎も険しい顔でそれを見下ろす。

由紀 ……。

由紀はおもむろに優子の顔に手をかけると、閉じられた瞼を無理やりこじ開ける。

濁った眼球と由紀の目があう。

由紀 あった……！

西崎 なんですか？

由紀 大事なサンプルをみすみす灰にしてしまうところでしたね。

西崎 え？

由紀 私の、鞆の中にクリアファイルが入ってるので、それちよつと見てください。

西崎 え？ あ、はい。

西崎はクリアファイルを取り出す。中には英語の論文が入っている。

西崎はそれにぎっぎつと目を通していく。

由紀 それ、この前の集団自殺の犠牲者が書いた論文なんです。簡単に言ってしまうと、人間の中に、通常の人間とは異なる視覚を有した人間が存在するってことが書いてあるんですけど。この前の集団自殺の犠牲者は、どうやらそういう特殊な視覚を持った人間である可能性が高いんですよ。

西崎 どういうことですか？

由紀 つまり、あの発光現象を見て、私たちとは違う情報を得ていた可能性がある。たとえば、海に飛び込め、みたいなね。

西崎 集団自殺は、この特殊な目を持った人間が、光に影響を受けて行ったって言うんですか？

由紀 そうです。

由紀は優子の身体を調べ、無くなった半身の繋ぎ目を凝視している。

由紀 ……すごい。

西崎 しかし、それだけで人間が自ら命を絶つてしまうのか？

由紀 命を絶ったんじゃないとしたら？

西崎 ……。

由紀 むしろどうなんですか？ 本当は思ってるんじゃないんですか？

飛び込んだ人間が、海繭になったって。

西崎 それは……。

由紀 この身体を見て、そう思わない方がおかしいでしょ。下半身が完全に膜と一体化しているし。それに、もし海繭と優子が別物なら、ど

うやって5年間も腐らずに身体が保存されてたんですか？ 血流があった証拠でしょう？

西崎 ……それはその通りですけど。

由紀 じゃ、やりますよ。

西崎 なにを？

由紀 目を繰り抜くんですよ！

西崎 え？

由紀 話聞いてなかったんですか？ この子の目を調べて、その論文と

構造が一致すれば、集団自殺した人間がこの目を持っていた可能性がぐんと高まる。

西崎 でも……、今ここですか？

由紀 だっていつするのよ？ 明日には燃やしちゃうのよ？

西崎 いや、そうなんですけど。でも……

愛が部屋の入り口に立ちすくんで、2人の所業を凝視している。

愛 何してるの？

西崎 いや、あの、これは……

由紀 ああ。ちようどよかった。伯母さんいる？ 一応話だけしときたいから。

愛 ちよつと待って。え？ 何するの？

由紀 目を繰り抜くのよ。論文によると、眼の特殊性の1つに光を細かく分散させるためのプリズム組み込まれてるらしいの。これはエナメル質と一緒に完全にタンパク質の含まれない無機物なのね。だからどんなに遺体の腐敗が進んでいたとしてもそれは保存されているから、今からでも取り出して調べれば有力な証拠となる。

愛 ごめん……いったい何の話？

由紀 やつと優子の正体が分かるかもしれないってことよ。

愛 え？

由紀 この子の目を取って調べれば、今回の集団自殺や、クジラモドキや、海蘭の話が全部つながるのかもしれないの。

愛 だから？

由紀 だから火葬する前に、目だけ取り出しておかないと。

愛 ……頭おかしいの？

由紀 は？

愛 頭おかしいんじゃないの？ え、つまり、優子の顔に今から傷をつけるの？ やつとうちに帰ってきたのよ？ 帰ってきて、またそんな

酷いことするの？

由紀 いや。そっちこそよく考えてよ。悪いけど、優子もう死んでるのよ？ 抜け殻よ。それをどうしようが、酷いとか関係ないでしょ？

愛 あんた心がないの？

由紀 は？ 私だつて必要ないならこんなことしないわよ。だけど、やらないと真実が分からないじゃない？ それならやるしかないでしょ？

よ？ 感情に流されて、最後の機会を無駄にしようとしてるのはあんたじゃない。

愛 そこまでして真実なんて知りたくない！

由紀 正気？

愛 正気じゃないのはそっちよ！ どうして自分の家族にそんなことができるの？ 5年ぶりに会えた顔を見て何も思わないの？ そこに寝てるのに、もう動かなくて、顔の色も、身体の色も、そんな風に変わってしまって、それでも優子なのよ？ 正体ってなによ？ 正体も何も、その子は優子じゃない！ それ以外なんだっていうのよ！

由紀 ……。

沈黙。

部屋の奥で人の気配があり、小百合がやってくる。

小百合 どうしたの大声出して。

そして、小百合はこの現状を見て息を呑む。

小百合 何があったの？ どういうこと？

由紀 ちようどよかった。愛じゃ話にならないの。伯母さん。悪いけど、優子の目を片方ちようだい？

小百合 なに言い出すの？

由紀 西崎先生にも説明したんだけど、優子の目にこの子の正体が分かるかもしれない重要な証拠が残されてる可能性があるの。

小百合 だから今からこの子を傷つけるの？

由紀は天を仰ぐ。

由紀 先生からも言ってもらえませんか？ これは必要なことなんだつて。今を逃したら真実が灰になってしまうかもしれない。最後なんだつて。

西崎 気持ちは分かりますけど、もう解剖は終わってますし。

由紀 ……え？ 私に言ったんですか？

西崎 はい。

由紀 え、ちよつと、みんな正気なの？ さつきから可愛そうとか、新しく傷をつけるとか言ってるけど、優子はもう死んでるからね？ これ死体なの。分かってる？

愛は思わず由紀に手を上げている。

由紀 なにすんのよ！

愛 出て行け。二度と顔出さないで。

由紀 ちよつと……。

由紀はメスを床に叩きつけ、愛の頬を張る。

由紀 引き下がらないわよ。

愛 優子には指一本触れさせない。

由紀 思考停止してるの？ ちよつとは頭使ってよ。何で分からないの？

愛 あんたが思ってるより、世界はもっと眼に見えないもので繋がってるの。血は繋がってなくなってる、優子は私のただ1人の姉なのよ。

2人は膠着する。

由紀 私だって……今生きてる子供がいる。

愛 ……え？

周囲の空気がざわつく。

小百合 今なんて？

由紀 5年前よ。私、その砂浜で子供を拾ったの。

愛 は？

小百合 それって……。

由紀 ええ。

小百合 その子は？

由紀 私が育ててる。

小百合 え！

愛 うそ……。

由紀 5年前よ。優子が飛び込んだって話を聞いて、海岸を探してたら、代わりにその子を見つけたの。それまで、子供なんて可愛いと思つたこと一度もなかった。うるさくて、面倒で、汚くて、得たいが知れない。仕事だつてできなくなる。だけど、その子を抱き上げた瞬間、私の中で完全に何かのスイッチが切り替わってしまったの。論理的に考えて異常だつて分かってる。だけど可愛くしようがない。私がこの子を助けなきゃって。どうしようもなかったの。こんな感情初めてで。戸惑つてばっかだったけど。それから色んな価値観が変わっちゃって。仕事もできるだけ時間に余裕のある診療科で探したし、学校のこととか、住む場所とか、全部その子中心に考えてしまう。小百合 どうして言ってくれなかったの？

由紀 言えるわけじゃないじゃない？ 海で拾った子供を育ててますって？ 私なら理解できない。なんでそんな子供育てるんだって。それに……今まで、私、その子は、ストウマミって人の子供じゃないかと思つていたから。

愛 田中君の言つてた。

由紀 テントの近くだったから。だけど、その人は集団自殺したようだったし。

小百合 取られると思ったのね。

由紀 そうよ。

小百合 だからって。よく今まで1人で。

由紀 私はちゃんと知っておきたいの。私の子供は何者なのか？ 知らないまま放置しておくわけにはいかない。対策も立てられない。

小百合 ……。

由紀 だから、優子の目を下さい。

小百合 ……分かった。

愛 母さん。

小百合 愛。次の優子になるかもしれない、その子のために、堪えて。

愛と由紀は無言で見つめあう。

小百合 お父さん呼んでくるわ。裏にいるから。

愛 なにするの？

小百合 ちゃんと優子の顔を見て、お別れしましょう。由紀ちゃんもね。

由紀 ……うん。

小百合は部屋を出て行く。

愛は優子の傍に跪き、開かれた臉をもう一度閉じてやる。

愛 ……優子。最後の最後まで、ごめん。

7

1年後。

愛 結局、由紀ちゃんの脳には、軽度の「影響」がみられたんだってね。

小百合 影響？

愛 クジラモドキの赤ちゃんが出す、フェロモン？ 的なもので、母親になる人は脳が少し変化するらしいよ？

小百合 そうなの。

愛 そうなのって。母さんも検査されて、説明聞いたんじゃないの？

小百合 よく分からなかったから。

愛 えー。

小百合 そりゃだって、子供を持つってそういうことよ。

愛 じゃあすごい変なこと聞くけど、優子と私、同じように好きだった？

小百合 それ。違ったって答えていいの？

愛 いや。そうなんだけど……。

小百合 同じよ。どっちもすごい劇的な出会い方をして、今までいなかった人が突然私の子供になって。確かに、そうね。優子を見つけたとき、「スイッチ」が入ったという感覚は本当かもしれない。だけど、

必死にあなたを産んで、ヘロヘロになりながら隣に並べてもらって顔を見たとき、やっぱりスイッチが入ったような気がしたものよ。脳の変化とか大げさに言うけど、そんな大したことなのかしらね。

愛 ……そんなもんか。

小百合 まあ、子供ができたなら分かるわよ。

愛 ……うん。

西崎、田中が外から戻ってくる。

田中はなにやらゴーグルのようなものを装着している。

田中 おお！ すげー！

愛 うるさい。

田中 部屋の中は、また全然違う。三日月さん、うわ、そんな顔になるの？

愛 ちょっと！

田中はゴーグルをはずす。

田中 あー、目が回る。

西崎 面白いだろ？

田中 はい！ もう色の洪水って感じですよ。太陽もいろんな色が混ざり合っただけに見えるし。これが、クジラモドキの見える世界なんです！

西崎 まあ。結局人間の可視光線に置き換えてるから、実際はもつとすごいんだと思うけど。

田中 これでクジラモドキと話ができるようになったんですか？

西崎 一応、発光機は完成したから、そうだね。まあ、やっとスタート地点に立ったただけだけど。

田中 いや、葦ノ浦チームは、クジラモドキ研究では世界一じゃないですか。

西崎 新聞にそう書かれただけですね。お恥ずかしい。

愛 実際、これで会話したんですか？

西崎 いや。まだまだこれからだよ。しかも、うちの施設のクジラモド

キは、この施設で生まれてるから、他の仲間と一度も会ったことがないわけ、それも大きな問題なんだけど。

愛 なるほど。確かに。

田中 先生。クジラモドキの成体は、記憶を引き継いでいたりはないんですか？

西崎 それも分からない。

愛 もしかしたら覚えてるのかもしれないんだ。

西崎 可能性は大いにあるよ。

愛 そうか。

小百合 はい、どうぞ。

小百合が定食を机に並べる。

西崎 おお。

田中 これがザンズキのから揚げ？

愛 そうだよ。

田中 タコのから揚げみたいだ。

西崎 タコだからね。

愛 え、初めて？

田中 1年前は食べられなかったから。

愛 そうか。もうそんなに経つんだね。

田中 よし。では、いただきます。

小百合 はい。

FIN